
中日春秋（朝刊コラム）

2016年6月4日

中日春秋

地球の大きさを測るという偉業を初めて成し遂げたのは、古代ギリシャのエラトステネスである

▼南北に八百数十キロ離れた二つの地点で夏至の正午にできる影の角度を測り、地球の円周を計算した。たった一つの頭脳と影をつくる棒だけで巨大な謎を解いた。その興奮はどれほどだったろう

▼それからおよそ二千二百年後、小学五年の少年が名古屋の繁華街にある中日ビルの展望レストランから風景を眺めていた。遠くに父の故郷が見え、そこまで二十キロと聞いた。ビルの高さを五十メートルとして学校で習った図形の性質を使えば、自分で地球の大きさを計算できるはず。少年は、エラトステネスの興奮を追体験したわけだ

▼その小学生が、きのう中日文化賞を贈られた世界的な物理学者・大栗博司さん（54）だ。中日ビルでの贈呈式で「観察と思考の力によって、窓から見える風景だけで地球の大きさが分かるということは素晴らしいと、その時に強い印象を受けました」と語った

▼二十世紀を代表する物理学者の一人・ファインマン博士は、こういう言葉を残したという。「本は事実を示してくれるが、そこに命を吹きこむのは君の想像力だ」（『ファインマン語録』岩波書店）

▼かつて大栗少年がそうしたように、想像力で命を吹き込まれることを静かに待っている事実や知識が、私たちのまわりには、満ちあふれているのだろう。

Copyright © The Chunichi Shimbun, All Rights Reserved.